

目次

第1章 ● 青年期の課題と自己形成

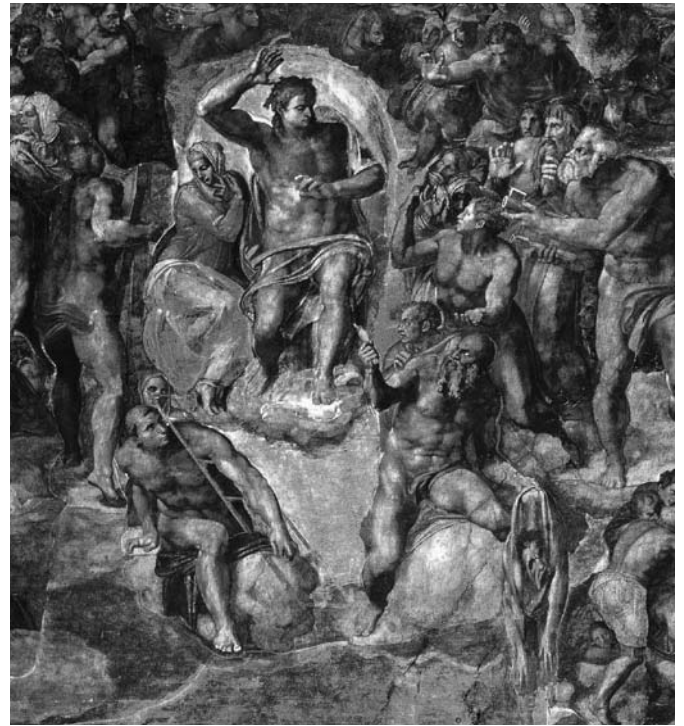
青年期とは 2
 自分との出会い 4
 人間関係のひろがり 5
 対人関係を生きる 8
 青年の自己形成 9
 現代青年の生活と意識 11

第2章 ● 人間としての自覚

第1節 ギリシアの思想 14
 哲学の誕生 15
 原典資料／自然哲学者・ソフィスト 16
 ソクラテス 17
 原典資料／ソクラテス 19
 プラトン 20
 原典資料／プラトン 21
 アリストテレス 22
 ヘレニズムの思想 23
 原典資料／アリストテレス・エピクロス 24
 第2節 キリスト教の思想 25
 旧約聖書の思想 26
 イエス 27
 パウロ 29
 原典資料／旧約・イエス・パウロ 30
 第3節 イスラムの思想 31
 マホメット 32
 原典資料／『コーラン』のことば 33
 第4節 仏教の思想 34
 仏陀 35
 大乘仏教の思想 37
 原典資料／仏陀・大乘仏教 38
 第5節 中国の思想 39
 孔子 40
 原典資料／『論語』のことば 42
 孟子 43
 荀子 44
 原典資料／孟子・荀子 45
 老子 46
 莊子 47
 原典資料／老子・莊子 48
 ワイドテーマ・1 人生と宗教49
 ワイドテーマ・2 芸術と人生55

第3章 ● 日本の思想

第1節 日本の風土と古代日本人の考え方 61
 古代日本人の自然と「神」 62
 古代日本人の倫理観 63
 第2節 仏教の受容と展開 64
 聖徳太子 66
 最澄 67
 空海 68
 原典資料／聖徳太子・最澄・空海 69
 法然 70
 親鸞 71
 原典資料／法然・親鸞 72
 道元 73
 日蓮 74
 原典資料／道元・日蓮 75
 第3節 近世日本の思想 76
 朱子学派の思想 78
 中江藤樹 79
 原典資料／朱子学派・中江藤樹 80
 伊藤仁斎 81
 荻生徂徠 82
 原典資料／伊藤仁斎・荻生徂徠 83
 本居宣長 84
 原典資料／本居宣長 85
 石田梅岩 86
 安藤昌益 87
 二宮尊徳 88
 原典資料／石田梅岩・安藤昌益・二宮尊徳 89
 第4節 近・現代の日本の思想 90
 福沢諭吉 92
 中江兆民 93
 原典資料／福沢諭吉・中江兆民 94
 内村鑑三 95
 新渡戸稲造 96
 原典資料／内村鑑三・新渡戸稲造 97
 吉野作造 98
 夏目漱石 99
 平塚らいてう 100
 原典資料／吉野作造・夏目漱石・平塚らいてう 101
 柳田国男 102
 原典資料／柳田国男 103
 西田幾多郎 104
 和辻哲郎 105
 原典資料／西田幾多郎・和 106
 丸山眞男 107
 小林秀雄 108
 原典資料／丸山眞男・小林秀雄 109



第4章 ● 現代に生きる人間の倫理

第1節 近代の倫理思想 ————— 110

ルネサンスの思想	112
ルター	113
カルヴァン	114
原典資料／ルター・カルヴァン	115
モンテーニュ	116
パスカル	117
原典資料／モンテーニュ・パスカル	118
フランシス・ベーコン	119
デカルト	120
原典資料／ベーコン・デカルト	122
ホッブズ	123
ロック	124
原典資料／ホッブズ・ロック	125
ルソー	126
原典資料／ルソー	128
カント	129
原典資料／カント	131
ヘーゲル	132
ベンサム	133
J.S.ミル	134
原典資料／ヘーゲル・ベンサム・ミル	135

第2節 現代の倫理思想 ————— 136

空想的社会主義者	138
原典資料／オーエン・サン=シモン・フーリエ	139
マルクス	140
原典資料／マルクス	141
現代の社会主義	142
キルケゴール	143
ニーチェ	144
原典資料／キルケゴール・ニーチェ	145
ヤスパース	146
ハイデッガー	147
サルトル	148
原典資料／ヤスパース・ハイデッガー・サルトル	149
デューイ	150
原典資料／パース・ジェームズ・デューイ	151

シュヴァイツァー	152
ガンジー	153
マザー=テレサ	154
原典資料／シュヴァイツァー・ガンジー・マザー=テレサ	155
フロイト	156
ユング	157
原典資料／フロイト・ユング	158
アドルノ	159
レヴィ=ストロース	160
ドゥルーズ	161
原典資料／アドルノ・レヴィ=ストロース・ドゥルーズ	162

第5章 ● 現代の諸課題と倫理

現代の課題1-A / 生命倫理	163
現代の課題1-B / 環境倫理	169
現代の課題2-A / 家族・地域社会	175
現代の課題2-B / 情報社会	179
現代の課題3-A / 異文化理解	183
現代の課題3-B / 人類の福祉	187

索引 191

図上左 原罪と楽園追放

図上右 最後の審判 (部分)

ミケランジェロ (1475~1564) 作

2 儒教の根底にあるもの(徳治主義)

—人間と文化への信頼

愛情と政治

人間の人間に対する愛情、それを以て道徳の基礎とすることは、おおむねの倫理説、乃至は宗教の、一致するところであるであろう。いいかえれば、ひとり孔子の教えばかりの、専らにするところでは、ないであろう。ただ孔子の教えには、他の教えには必ずしも見られない、少なくとも必ずしも強調されない、二つの特殊な面がある。

一つは政治の重視であり、また一つは学問と知識の重視である。もうすこしくわしくいえば、前者は、愛情の最高の表現は政治にあるとすることであり、後者は、愛情は必ず思慮を伴うことによって完成するとすることである。……

孔子に於ける政治の重視、それは、論語の次の条によって、最もよく示される。

例のやんちゃな弟子の子路が、君子の資格について質問したことがある。

—子路、君子を問う。

それに対し、孔子はまず答えている。

—己を修めて以て敬め。

或いは別のよみ方では、

—己を修むるに敬みを以てせよ。

いずれにせよ、自己の道徳的完成、それが君子、すなわち紳士たるものの第一の資格とするのである。ところで子路はいかにも子路らしく、無遠慮に反問している。それだけでいいのですか。

—斯くの如きのみか。

すると孔子は答えている。

—己を修めて以て人を安めよ。

「人」とは、自己に近い範囲の人間、つまり家族隣人のことであると、注釈にはいう。

しかし子路はなお満足しなかった。

—斯くの如きのみか。



▲亡命の生活の後に魯国にもどった孔子は、3000人といわれる弟子の教育と古典の整理に専念した。

と、もう一度、おなじ質問をくり返している。それに対する孔子の答えは、強烈である。

—己を修めて百姓を安めよ。己を修めて百姓を安むることは、堯舜(古代の聖王)すらなおこれに病みしものを。

人間の任務とは?

ここに至って、孔子の態度は、大へんあきらかである。「己を修めつつ、百姓を安んぜよ。」百姓とは農民の意ではない。すべての人民の意である。つまり為政者として、すべての人民を安定させよ。それが君子の、つまりすぐれた人間の、究極の任務であるとするのである。そうしてそれは、堯舜のようなすぐれた為政者にも困難であったと、附言されており、それがすべての人間への期待ではないことが示されているが、それと共に、人間の任務が政治にあることを主張するもので、この言葉があることも、至ってあきらかである。

これは、人間は愛情の動物であることを信じ、人間の能力の無限を信じ、それゆえにこそ、何にもまして人間を愛した孔子としては、当然の帰結であったであろう。

—鳥獸は与に群を同じくす可からず。吾れ斯の人の徒と与にするにあらずして、誰と与にせん。〈注：鳥や獣とはいっしょに暮らすわけにはいかない。わたしはこの人間の仲間といっしょに居るのでなくて、だれといっしょに居ろうぞ。〉

人間の愛情は、人間の相手をもつことによってこそ、成立する。なるだけ多くの相手に、愛情をふりかける方法として、政治は、たしかに有力な方法である。

(吉川幸次郎『中国の知恵』新潮文庫)

解説

孔子は、何よりも人間が愛情の動物、善意の動物であり、その無限の能力を信じたればこそ、個々人に対して、内面的修養を通して道徳的に完成するよう求めたのであった。だが、孔子にとって、その個人の道徳的な完成は、たんに個人にかかわるのみでなく、国家社会のためでなければならなかった。人間は人間社会以外に生きようがなく、ならば、この現実社会を理想社会としようとするのが、孔子を祖とする儒教の根本精神である。

子路と孔子

闊達自在、些かの道学者臭も無いのに子路は驚く。この人は苦勞人だと直ぐに子路は感じた。可笑しいことに、子路の誇る武芸や膂力に於いてさえ孔子の方が上なのである。ただそれを平生用いないだけのことだ。使者子路は先ずこの点で度肝を抜かれた。放蕩無頼の生活にも経験があるのではないかと思われる位、あらゆる人間への鋭い心理的洞察がある。そういう一面から、又一方、極めて高く汚れないその理想主義に至るまでの幅の広さを考えると、子路はウーンと心の底から呻らざるにはいられない。とにかく、この人間は何処へ持って行っても大丈夫な人だ。(中島 敦『弟子』)



キルケゴール

S. A. Kierkegaard

1813~1855

人物 デンマークの思想家、実存主義の先駆者

著作 『あれか=これか』『死に至る病』

キルケゴールの求めたもの

キルケゴールは、19世紀前半の近代社会に生きてきたが、自己の特異な宗教体験にもとづいて罪の意識を深め、「人はいかにしてキリスト者となるか」ということを生涯の課題とし、その探求の過程で「実存」という考え方を展開した。

実存の根本にある不安の概念とは

——人間はなぜに罪を負うものとなったか

原罪 教義学的に言えば、原罪とは、アダムの墮罪による罪性として受け継がれた、全人類とその子孫にわたる悪の伝播と存続である。したがって人間はすべて生まれながらにして罪につながっている存在である、というのがキリスト教の人間理解である。しかし、悪の伝播と存続は、あたかも遺伝病や負債相続のように単に外的に負わされたものではなく、自らその責めを負うことのできる内的なものとならなければならない。そのためには、各自が自ら罪に墮ちたのでなければならない。アダム以後のわれわれも、アダムと同様に、無垢な状態から自らの意志によって責めあ



アダムとエバ（レンブラント画）

るものとなった、と考えねばならない。原罪は自由意志の喪失状態であるが、それは、人間の自発的な行為が自由においてまさに自由を喪失する、という自己矛盾の構造をなしている。キルケゴールは、われわれのなかのアダムを心理学することによって、自由の自己矛盾的行為を不安の概念によって説明しようとしたのである。

なぜ罪に墮ちたのか 聖書の記述によれば、アダムは、「神のように善悪を知る者となる」木の実を食べることを神に固く禁じられていたが、蛇にそそのかされてそれを破り、エデンの園を追放された、とある。それにしても、アダムはなぜ神の禁止の言葉に従わなかったのであろうか。蛇の誘惑に原因を帰することは、〈自ら招致した罪〉というわれわれの立場と矛盾する。アダムはそれを自ら招き寄せたと考えねばならない。

【キルケゴールの生涯】

西暦	年齢	こと が ら
1813	0	コペンハーゲンに、七人兄弟の末子として生まれる。
30	17	コペンハーゲン大学に入学。
34	21	4月15日、日記をつけ始める。ギーレイエへ旅行。ギーレイエから帰った日に母アンネ病死。
37	24	初めてレギーネ・オルセンに会う。母校のラテン語講師。
38	25	父ミカエル・ペーダーセン死去。
40	27	神学の国家試験に合格。レギーネと婚約。
41	28	哲学の学位論文を提出、学位を認められる。婚約を破棄。ベルリンに旅立つ。シェリングの講義をきく。
42	29	『誘惑者の日記』脱稿。
43	30	『あれか=これか』『おそれとおのき』『反復』出版。
46	33	評論紙『コルサル』がキルケゴールの漫画と嘲笑文を掲載。
49	36	『死に至る病』刊行。
55	42	キリスト教会のあり方を批判する闘いのなかで死去。

しかし墮罪以前のアダムは無垢であり無知であった（善悪を知る者となったのは、木の実を味わったあとであるのだから）。無知なる彼が神の言葉の禁止の意味を理解したはずがない。彼は他からそそのかされたわけでもなく、またそれと知って悪をなしたわけでもない。とすれば、無垢から責めへの移行はどうして生じたのか。この難問はただ「不安の概念」によってのみ解かれうる。

不安の概念

キルケゴールによれば、その時アダムをとらえたのは「不安という見知らぬ力」であったが、「不安をおそれながらも、それを愛し、そのなかに溺れた」点において彼に責めがある。神の禁止の言葉はアダムに自由の可能性を目覚めさせた。「不安の無として無垢を素通りしていったものが、今やアダム自身のなかに入り込んできたのである。それはなお無であるが、〈なしうる〉こと不安な可能性である」。自由が自身の可能性をのぞき込んで不安にかられ、その身を支えるために有限性につかまる時、めまいが生じて失神し、気がついた時には責めある者となっていた。このようにしてアダムは第一の罪を犯したのである、と。

アダムの罪によって罪性がこの世に入り、人類の歴史がそこから始まることとなる。アダム以後の個々人も、不安のもとに自らアダムと同じ行為（無垢から責めへの飛躍）をそのつど繰り返す。各個人は歴史のなかでその始まりから始めるのである。ヘーゲル哲学における「始原」や、「移行」とか「否定」とか「媒介」というヘーゲルの歴史哲学を動かす運動原理に対して、キルケゴールはその思弁性を批判し、〈不安の概念〉をもって歴史の始原とし、実存の運動原理となした。不安はその意味で、アリストテレスの〈驚異〉やデカルトの〈懐疑〉とともに、哲学のもう一つの出発点でもある。（大屋・細谷編『キルケゴールを学ぶ人のために』世界思想社）

解説

キルケゴールは、何かが気がかりで安心できないさまを意味する「不安」という日常語に人間のあり方にかかわる実存哲学的な意味づけをおこなった。資料は、不安の概念を手がかりにして、なぜアダムは最初の罪を犯したのかを説明した部分の解説であるが、不安が人間の自由に由来していること、また、その自由な可能性が不安を生み、自ら自由を喪失する（罪を犯す）矛盾に陥ることなど、実存としての人間のあり方がとらえられている。



▲プリペイド式携帯電話の裏売買まかり通る ネットや一部の店、身元確認求めず

情報の海をどう泳げばいいのか？

情報社会の倫理

携帯電話一つで何でも用がたせる世の中が実現しつつある。情報技術（IT）の革命が私たちの生活を確実に変えそうだ。私たちはまさに情報の海を泳いで生きる術を求められることになる。

まず情報とは何かをしっかりとつかみ、テレビやインターネット・ケータイなど今後のデジタル世界で生きる知恵と術を身につけたい。

情報化社会とは何か

情報化社会のもつ不安な一面

情報は一定の意味解釈を運ぶ記号

そもそも情報化社会とは、情報を担う記号の意味解釈の仕方が決まっている、あるいは限定されていることを前提にした社会です。記号の意味解釈が決まっていなければ、たとえ相手が情報を発しても、とんでもない誤解や曲解が生まれて、何を言っているのかわからないからです。その証拠に、ふつうわれわれが「情報」といって、頭に思い浮かべるのは、軍事情報や経済情報など、日常用いられる数値データを伴ったもの、誰が見ても意味解釈のゆらぎが少ない、一種の客観性をもっているものです。小説や詩を情報だと言う人はあまりいません。受けとった人によって、その解釈がそれぞれ異なってくるからです。

情報の意味解釈の落とし穴

われわれは、この情報の意味解釈という点を忘れがちになっているという気がします。

例えば、テレビでビールのコマーシャルが流れているとしましょう。その中に、男が汗をかきながら、ごくごく喉をならして、実においしそうにビールを飲むシーンが出てくるとします。見る側はそのシーンを見て、「暑そうだな」とか「この男はカッコいいなあ」とか、いろいろな解釈があるように思える。ところが、そこには作り手の極めて恣意的な意味解釈が入れ込んであるのです。この場合なら、われわれがいつのまにかビールの売り上げを伸ばす意味解釈をするようなイメージ操作が巧妙になされているのです。

つまり、伝送される情報は、大量生産・大量消費の商品経済と結びつき、「売れること」「役に立つこと」が唯一の意

味解釈の基準、社会生活の価値になっていく。テレビのワイドショーが芸能人のスキャンダルを延々と伝えるのも、「面白いから」「視聴率がとれるから」でしょう。ものめずらしく、刺激的なものが、“善”とされているのです。そして、何だかわれわれもそれが魅力あるもの、大事なもののよう感じ始めているのではないか。いつのまにか誘発されている気がします。

巧妙さ増すデジタル時代の情報操作

コンピュータが安価になり、ますます身近な存在になっていけば、今まで以上に情報が安い価格で、無制限に複製・編集され、拡大再生産されて、大量に流れていくでしょう。

さらに、デジタル化によって、アナログな信号波形をサンプリングして数値に直せますから、記録伝達もしやすくなるし、いくらでも修正し、操作できるようになる。……写真や映像などアナログなイメージ情報も、いったんデジタル化すればコンピュータ・グラフィックス技術でいかようにも細工が可能です。これを悪用すれば、ニセの証拠写真で世間を操作することもできるでしょう。

メディアからあふれる情報をどう意味解釈すればいいのか、自分にとって何が大事な問題なのか、ますます自分で問いかける余地がなくなる可能性があります。処理しきれないほどの情報量に囲まれて、誰もが非常に忙しくなるのではないかと。気がつかないうちに作り手の意味解釈を無批判に受け入れてしまうかもしれません。

われわれは表面的には情報に対して自由に意味解釈しているようにみえても、その実、深層ではとても不自由で、真綿で首を絞められているような、そんな生きにくい社会になる恐れもあるわけです。

(西垣 通「夢物語や不安を超え、多面的な語り合いの世界を」
AERA Mook『情報学がわかる』所収)